## 奉教人の死(芥川龍之介)

未来永々の果しなき楽しみに比ぶれば、夢の知の如し。たとひ三百歳の齢を保ち、楽しみ身に余ると云ふとも、

—慶長訳 Guia do Pecador —

の甘味を覚ゆべし。善の道に立ち入りたらん人は、御教にこもる不可思議

—慶長訳 Imitatione Christi —

\_

まん」衆(法兄弟)も、よも怪しいものではござるまいとおりいる(寺院)に、「ろおれんぞ」と申すこの国の少年がごれしや」(寺院)に、「ろおれんぞ」と申すこの国の少年がごれしや」(寺院)に、「ろおれんぞ」と申すこの国の少年がごれしや」(寺院)に、「ろおれんぞ」と申すこの国の少年がごれしや」(寺院)に、「ろおれんぞ」と申すこの国の少年がごれしや」(大国)父の名は「でうす」(天主)などと、何時もらいそ」(天国)父の名は「でうす」(天主)などと、何時もらいそ」(天国)父の名は「でうす」(天主)などと、何時もらいそ」(天国)父の名は「でうす」(天主)などと、何時もらいそ」(天国)父の名は「でうす」(東教徒)の輩であらない。なれど親の代から「ぜんちよ」(異教徒)の輩の奉教人衆が戸口に、餓ゑ疲れてうち伏して居つたを、参詣の奉教人衆が戸口に、餓ゑ疲れてうち伏して居つたを、参詣の奉教人衆が戸口に、餓ゑ疲れてうち伏して居つたを、参詣の奉教人衆が戸口に、餓ゑ疲れてうち伏して居つたを、参詣の奉教人衆が戸口に、餓ゑ疲れてうち伏して居つたを、参詣の事とない。なれば伴天連はじめ、多くの「いる事とない。

ものを、無下にめでいつくしんで居つたげでござる。りであらうずなど申し、いづくの生れ、たれの子とも知れぬかりであつたれば、一同も「ろおれんぞ」は天童の生れがはなは、幼いにも似ず「すぺりおれす」(長老衆)が舌を捲くばぼされて、ねんごろに扶持して置かれたが、その信心の堅固

して又この「ろおれんぞ」は、顔かたちが玉のやうに清らいたの人々のあはれみを惹いたのでござらう。中でもこの国の「い人々のあはれみを惹いたのでござらう。中でもこの国の「いたに、性、得の剛力であつたに由つて、伴天連が「ぜんちよ」がではごさない。それが「ろおれんぞ」と、世でもでは、「えけれしや」の出入りにも、、必、仲よう手を組み合せて居つた。この「しめおん」は、元さる大名に仕を組み合せて居つた。この「しめおん」は、元さる大名に仕を組み合せて居つた。この「しめおん」は、元さる大名に仕た、性、得の剛力であつたに由つて、伴天連が「ぜんちよ」がではごさない。それが「ろおれんぞ」と、睦じうするさまは、だっぱいの人」山の、檜に、、葡萄かづらが纏ひついて、花咲いたやうばのん」山の、檜に、、葡萄かづらが纏ひついて、花咲いたやうばのん」山の、檜に、、葡萄かづらが纏ひついて、花咲いたやうばのん」山の、檜に、、葡萄かづらが纏ひついて、花咲いたやうであつたとも申さうず。

たと申す事がござない。まして「えけれしや」への出入りににも、娘は香炉をさげた「ろおれんぞ」の姿から、眼を離しともども「えけれしや」へは参る。慣っであつたに、御祈の暇と云ふ事ぢや。この傘張の翁も天主の御教を奉ずる人故、娘から遠からぬ町方の傘張の娘が、「ろおれんぞ」と親しうするがその頃怪しげな噂が伝はつたと申すは、「さんた・るちや」て、「ろおれんぞ」はやがて元服もすべき時節となつた。したてる程に三年あまりの年月は、流るるやうにすぎたに由つ

申す。 幸、「ろおれんぞ」の前にその文をつきつけて、嚇しつ賺し は、又人一倍ぢや。始はかやうな淫な事を、ものものしう詮 おれんぞ」は、唯憂はしげに頭を振つて、「そのやうな事は一 私は文を貰うたばかり、とんと口を利いた事もござらぬ」と 宛てた娘の艶書を拾うたに由つて、人気ない部屋にゐたを はあるまい。どうぢや」ともの優しう尋ねられた。したが「ろ 美しい顔を赤らめて、「娘は私に心を寄せましたげでござれど、 たが、或時「さんた・るちや」の後の庭で、「ろおれんぞ」へ 元より、「ろおれんぞ」の顔さへまさかとは見られぬ程であ 議立てするが、おのれにも恥しうて、うちつけに尋ねようは ない。されば兄弟同様にして居つた「しめおん」の気がかり へ参る人々の間では、容易にとかうの沙汰が絶えさうもござ ひ、かうまで申すものに偽はあるまいと思されたげでござる。 天達もさすがに我を折られて、年配と云ひ、日頃の信心と云 向に存じよう筈もござらぬ」と、涙声に繰返すばかり故、伴 或日「ろおれんぞ」を召されて、白ひげを噛みながら、「その つ、さまざまに問ひただいた。なれど「ろおれんぞ」は唯、 さて一応伴天連の。疑。は晴れてぢやが、「さんた・るちや」 由つて伴天連にも、 傘張の娘と兎角の噂ある由を聞いたが、よもやまことで なれど世間のそしりもある事でござれば、「しめおん」 すて置かれず思されたのでござらう。

> うやうがなかつたとの事でござる。 につれなうしたのが悪かつたと云ふのやら、一円合点の致さ 娘と密通したのが悪かつたと云ふのやら、或は「しめおん」 まうたと申す。さればその「私が悪かつた」と囁いたのも、 るやうに身を開いて、一散に又元来た方へ、 も答へぬ間に、涙に濡れた顔を隠さう為か、 に「私が悪かつた。許して下されい」と囁いて、こなたが一言 それが飛びつくやうに「しめおん」の頸を抱くと、喘ぐやう に、いきなり駈けこんで来たは、少年の「ろおれんぞ」ぢや。 たのが恥しうもなつたに由つて、悄々その場を去らうとした しまうた。かう云はれて見れば、「しめおん」も己の疑深かつ とんと流・ さうな人間に見えるさうな」と、咎めるやうに云ひ放つて、 ぢつと相手を見つめたと思へば、「私はお主にさへ、嘘をつき は猶も押して問ひ詰つたに、「ろおれんぞ」はわびしげな眼で、 か何ぞのやうに、その儘つと部屋を立つて行つて 相手をつきのけ 走つて往んでし

に止めて置いては、御、主の「ぐろおりや」(栄光)にも関るるいでいるまん」衆一同の談合に由つて、破門を申し渡される事になつた。元より破門の沙汰がある上は、伴天連の手もとあれば傘張の翁は火のやうに、憤って、即刻伴天連のもとへられば傘張の翁は火のやうに、憤って、即刻伴天連のもとへをも追ひ払はれる事でござれば、燗口のよすがに困るのも目をも追ひ払はれる事でござれば、燗口のようがにでござる。の「ろおれんぞ」 ちやと、正しう父の前で申したげでござる。と云ふ騒ぎぢや。しかも腹の子の父親は、「さんた・るちや」とるいるとその後間もなう起つたのは、その傘張の娘が。学ったするとその後間もなう起つたのは、その傘張の娘が、学った

を追ひ払つたと申す事でござる。事ゆゑ、日頃親しう致いた人々も、涙をのんで「ろおれんぞ」

ず空の如く、凄じく顔を曇らせながら、悄々「さんた・るちりないたれば、それを機会に手を束ねて、嵐も吹き出でよう ば、時しも凩にゆらぐ日輪が、うなだれて歩む「ろおれんぞ」 るうて居つたが、その外の「いるまん」衆も、 く中へ、しをしをと戸口を出かかつたに、傍から。拳をふるう たしさが一倍故、あのいたいけな少年が、折からの、凩゚゚゚ト゚ト゚゚ ちきはまつたやうに見えたと申す。 の頭のかなた、長崎の西の空に沈まうず景色であつたに由つ 見送つて居つた。その時居合はせた奉教人衆の話を伝へ聞け や」の門を出る「ろおれんぞ」の後姿を、貪るやうにきつと が挫けたのでござらう。暫くは唯戸口に立つて、拳を空にふ わななく声で祈つたと申す事ぢや。「しめおん」もこれには気 ると、涙ぐんだ眼で、空を仰ぎながら、「御主も許させ給へ。 打たれたに由つて、思はずそこへ倒れたが、やがて起きあが ると云ふ悲しさよりも、「ろおれんぞ」に欺かれたと云ふ腹立 めおん」の身の上ぢや。これは「ろおれんぞ」が追ひ出され 『しめおん』は、己が仕業もわきまへぬものでござる」と、 その中でも哀れをとどめたは、兄弟のやうにして居つた「し したたかその美しい顔を打つた。「ろおれんぞ」は剛力に あの少年のやさしい姿は、とんと一天の火焔の中に、立 いろいろとと が吹

らせに詣でて居つた。

「ぜんちよ」の輩にはゑとりのやうにさげしまるる、天主き伏しする、世にも哀れな乞食であつた。ましてその前身は、炉をかざした昔とは打つて変つて、町はづれの非人小屋に起その後の「ろおれんぞ」は、「さんた・るちや」の内陣に香

らるるは元より、刀杖瓦石の難に遭うた事も、度々ござるげ の非人小屋を脱け出いて、月を踏んでは住み馴れた「さんた けて人音も静まる頃となれば、この少年はひそかに町はづれ を変へなかつたと申す事ぢや。なんの、それのみか、夜毎に更闌 海の魚介など、その日の糧を恵ませ給ふのが常であつた。 せ給うたのみか、施物の米銭のない折々には、山の木の実、 無量無辺の御愛憐は、その都度「ろおれんぞ」が一命を救は んでは、苦み悶えたとも申す事でござる。 に聞き及んだ。いや、 の御教を奉ずるものぢや。されば町を行けば、心ない童部に嘲 つた昔を忘れず、手くびにかけた「こんたつ」も、青玉の色 つて「ろおれんぞ」も、朝夕の祈は「さんた・るちや」に在 しい熱病にとりつかれて、七日七夜の間、 ・るちや」へ、 御主「ぜす・きりしと」の御加護を祈りまゐ 嘗つては、長崎の町にはびこつた、恐 。したが、「でうす」 道ばたに伏しまろ

は、いみじくも亦哀れな事でござつた。は知られうぞ。これも「でうす」千万無量の御計らひの一つ大憐みをかくるものもござらなんだ。ことわりかな、破門の人憐みをかくるものもござらなんだ。ことわりかな、破門のとんと「ろおれんぞ」を疎んじはてて、伴天連はじめ、誰一は、いみじくも亦哀れな事でござつた。

すがにかたくなしい父の翁も、初孫の顔は憎からず思うたの門されると間もなく、月も満たず女の子を産み落いたが、ささる程に、こなたはあの傘張の娘ぢや。「ろおれんぞ」が破

るまん」の「しめおん」ぢや。あの「ぢやぼ」(悪魔)をも挫ござる。翁は元よりさもあらうずなれど、ここに稀有なは「い せぬのを、怨めしう歎きわびた気色であつたれば、「しめおん」 翁を訪れて、無骨な腕に幼子を抱き上げては、にがに の訪れるのさへ、何かと快からず思ふげに見えた。 ・るちや」を出でてこの方、絶えて「ろおれんぞ」が姿を見 の優姿を、思ひ慕つて居つたと申す。唯、娘のみは、「さんた な顔に涙を浮べて、弟と「愛しんだ、あえかな「ろおれんぞ」 がうず大男が、 でござらう、娘ともども大切に介抱して、自ら抱きもしかか へもし、時にはもてあそびの人形などもとらせたと申す事 娘に子が産まれるや否や、 暇ある毎に 2傘張の がしげ

で

まことにその折の景色の凄じさは、末期の御裁判の喇叭の辛長崎の町の半ばを焼き払つた、あの大火事のあつた事ぢや。 見えた。なれど風は「益」加はつて、焔の舌は天上の星をも焦 一間どころに寝かいて置いたを、忘れてここまで逃げのびた れば、娘が産んだ女の子の姿が見えぬと云ふ始末ぢや。一定、れば、娘が産んだ女の子の姿が見えぬと云ふ始末ぢゃ。 る程に、一年あまりの年月は、瞬くひまに過ぎたと思召され さうず吼りやうぢや。それ故火を救ひに集つた町方の人々も、 人に。遮られずば、火の中へも馳せ入つて、助け出さう気色に のであらうず。されば翁は足ずりをして罵りわめく。娘も亦、 に包れたが、さて親子眷族、慌てふためいて、逃げ出いて見 傘張の翁の家は、運悪う風下にあつたに由つて、見る見る焔 かり、 い。ここに思ひもよらぬ大変が起つたと申すは、 この国の。諺にも、光陰に関守なしと申す通り、とかうす 一天の・ 世にも身の毛のよだつものでござつた。その時、 火の光をつんざいて、鳴り渡つたかと思はれ 、一夜の中に あの るば 、の音

んぞ」の姿が浮んだと申す。

その時心の眼には、、凩、に揺るる日輪の光を浴びて、 を描きながら、己も「御主、助け給へ」と叫んだが、 早くも火の柱、火の壁、火の。梁の中にはいつて居つた。「し ことに瞬く間もない程ぢや。一しきり焔を煽つて、 目もはなたず燃えさかる家を眺めて居る。と思うたのは、 にも美しい眉目のかたちは、一目見てそれと知られた。そのやいて、風に乱れる黒髪も、肩に余るげに思はれたが、哀れ 声の主をきつと見れば、いかな事、これは紛ひもない「ろお 聞き覚えもござれば、「しめおん」が頭をめぐらして、その らかに「御主、助け給へ」と叫ぶものがござつた。 らめられい」と申す。その時翁の傍から、誰とも知らず、 いた。して翁と娘とが、佇んだ前へ来て、「これも『でうす』 度煙をくぐつたと見る間に、 背をめぐらして、一散に逃げ出 を押しわけて、馳けつけて参つたは、あの「いるまん」の「し るより外に、せん方も亦あるまじい。所へひとり、 唯、あれよあれよと立ち騒いで、狂気のやうな娘をとり鎮め めおん」は思はず遍身に汗を流いて、空高く「くるす」(十字) が吹き渡つたと見れば、「ろおれんぞ」の姿はまつしぐらに、 れんぞ」ぢや。清らかに痩せ細つた顔は、 万事にかなはせたまふ御計らひの一つぢや。詮ない事とあき へ向うたが、あまりの火勢に辟易致いたのでござらう。 大丈夫でござれば、 めおん」でござる。これは矢玉の下もくぐつたげな、逞しい 「ろおれんぞ」が、乞食の姿のまま、群る人々の前に立 るちや」の門に立ちきはまつた、 ありやうを見るより早く、勇んで焔の中 美しく悲しげな、 火の光に赤うかが 恐し 声ざまに 多くの人 「ろおれ 「さんた 何故か つて、 い風

もなくまろび落ちたのでござる。

ば立つたばかりでござる。 とどよめくかと見れば、髪をふり乱いた「ろおれんぞ」が、 とどよめくかと見れば、髪をふり乱いた「ろおれんぞ」が、とどよめくかと見れば、髪をふり乱いた「ろおれんぞ」が、とかうする程に、 再 火の前に群つた人々が、一度にどつ

身も世も忘れた祈り三昧でござる。

にも娘はけたたましう泣き叫んで、一度は脛もあらはに躍り居あはせた程の奉教人衆は、皆目の眩む思ひがござつた。中あまりの凶事に心も消えて、「しめおん」をはじめ翁まで、

れて、風上にあつたあの「えけれしや」の門へ横へられた時

ぼつて、こなたへ投げた幼子は、折よく娘の足もとへ、怪我然え崩れる梁に打たれながら、「ろおれんぞ」が必死の力をし抱かれて居つたをいかにしようぞ。ああ、広大無辺なる「で抱かれるとしたと申す。さもあらばあれ、ひれふした娘の手にこつたが、やがて「雷」に打たれた人のやうに、そのまま大地立つたが、やがて「雷」に打たれた人のやうに、そのまま大地

ず一念から、真一文字に躍りこんだに由つて、翁の声は、再いない。 え絶えな「ろおれんぞ」が、とりあへず奉教人衆の手に舁か ただれた「ろおれんぞ」は、「しめおん」が腕に抱かれて、 にこの祈りを聞き入れ給うた。見られい。むごたらしう焼け りや」の御子、 子を囲んだ奉教人衆は、皆一同に声を揃へて、「御主、助け給 あがつたのでござる。これは元より翁のみではござない。 気づかはしげな、いたましい祈りの 言 となつて、夜空に高く に溢れようずけはひであつたとも申さうか。それより先に「し をほめ奉る声が、 くも火と煙とのただ中から、救ひ出されて参つたではないか。 如くに見そなはす、われらが御主「ぜす・きりしと」は、 めおん」は、さかまく火の嵐の中へ、「ろおれんぞ」を救はう もろ手をさしあげて立つた翁の口からは、「でうす」の御慈悲 へ」と、泣く泣く祈りを捧げたのぢや。して「びるぜん・ま されば娘が大地にひれ伏して、嬉し涙に咽んだ声と共に、 なれどその夜の大変は、これのみではござなんだ。息も絶 なべての人の苦しみと悲しみとを己がものの 自らおごそかに溢れて参つた。いや、

と、 さん」には、露ばかりの偽さへ、あらうとは思はれ申さぬ。道理 申し、その泣きぬれた双の眼のかがやきと申し、この「こひ かな、肩を並べた奉教人衆は、 ひさん」(懴悔)を、仕った。その思ひつめた声ざまの震へと 密通して、まうけた娘でおぢやるわいの」と思ひもよらぬ「こ 種ではおぢやらぬ。まことは妾が家隣の『ぜんちよ』の子と 傘張の娘は、 の事ぢや。それまで幼子を胸に抱きしめて、涙にくれてゐた 並み居る人々の目前で、「この女子は『ろおれんぞ』様 折から門へ出でられた伴天連の足もとに 跪 天を焦がす猛火も忘れて、

さへつかぬやうに声を呑んだ。

ŧ み、 焔の中から、妾娘の一命を、辱、くも救はせ給うた。その御憐身の危さをもうち忘れ、『いんへるの』(地獄)にもまがふ火 五体は 忽 『ぢやぼ』の爪にかかつて、寸々に裂かれようと 様を恋ひ慕うて居つたなれど、御信心の堅固さからあまりに 果てず、大地に身を投げて泣き伏した。 もをがまれ申す。さるにても妾が重々の極悪を思へば、この のお心の気高さは、 ひ知らさうと致いたのでおぢやる。なれど『ろおれ おれんぞ』様の種と申し偽り、 つれなくもてなされる故、つい怨む心も出て、腹の子を『ろ 娘が涙ををさめて、申し次いだは、「妾は日頃『ろおれ 中々怨む所はおぢやるまい。」娘は 御計らひ、まことに御主『ぜす・きりしと』の再来かと 妾が大罪をも憎ませ給はいで、 妾につらかつた口惜しさを思 「こひさん」を致いも 一今宵は御 んぞ』様 んぞ』

丁度この時の事でござる。殊勝にも「ろおれんぞ」は、罪人 ぢや、「まるちり」ぢやと云ふ声が、 重三重に群つた奉教人衆の間から、「まるちり」(殉 波のやうに起つたのは、

るまい。

おう、

伴天連のからびた頬の上には、とめどなく涙

乞食にまで身を落いた。して父と仰ぐ伴天連も、兄とたのむ を憐む心から、御主「ぜす・きりしと」の御行跡を踏んで、 でなうて、 「しめおん」も、皆その心を知らなんだ。これが「まるちり」 何でござらう。

< の

もはや遠くはあるまじい。唯、 居つたが、「ろおれんぞ」の息は、 めおん」とは、その枕がみに、蹲って、何かと介抱を致いて 尽きたげでござる。娘の「こひさん」に胸を破つた翁と「し げて、手も足も動かぬ上に、口をきかう気色さへも今は全く ながらも、僅に二三度額いて見せたばかり、髪は焼け肌 したが、 当の「ろおれんぞ」は、娘の「こひさん」 日頃と変らぬのは、 刻々に短うなつて、最期も 遙に天上 を聞き ば焦

息

儀を、 との「ろおれんぞ」の姿を見守られた。その。恭しげな容子 ざらうぞ。ここまで申された伴天連は、俄にはたと口を噤ん の国の奉教人衆の中にあつても、類稀なる徳行でござる。別 御裁判の日を待つたがよい。又『ろおれんぞ』がわが身の行ホルペルリサ より、益、『でうす』の御、戒を身にしめて、心静に末期のまり、益、『でうす』の御、戒を身にしめて、心静に末期の ぢや。何しにその幸なものを、人間の手に罰しようぞ。これ 後にして、おごそかに申されたは、「悔い改むるものは、「幸 ぶ夜風に白ひげをなびかせながら、「さんた・るちや」の門を を仰いで居る、星のやうな瞳の色ばかりぢや。 はどうぢや。その両の手のふるへざまも、 で、あたかも「はらいそ」の光を望んだやうに、ぢつと足も して少年の身とは云ひ――」ああ、これは又何とした事でご やがて娘の「こひさん」に耳をすまされた伴天連は、吹き荒 御主『ぜす・きりしと』とひとしく奉らうず志は 尋常の事ではござ

が溢れ流れるぞよ。

人衆、邪淫の戒を破つたに由つて「さんた・るちや」を逐はや。見られい。猛火を後にして、垣のやうに佇んでゐる奉教 ጊ エ゚ロークテテート 、 、 ポロヷゥ - - - の乳房が、玉のやうに 露 れて居るではないか。今は焼けただの乳房が、玉のやうに 露れて居るではないか。 ラー・・・ じい。おう、「ろおれんぞ」は女ぢや。「ろおれんぞ」 れた面輪にも、自らなやさしさは、 声もなく「さんた・るちや」の門に横はつた、 かなこの国の女ぢや。 れた「ろおれんぞ」は、 しい少年 ・きりしと」の御血潮よりも赤い、 見られい。「しめおん」。見られい。 の胸には、焦げ破れた衣のひまから、清らかな二つ 傘張の娘と同じ、 火の光を一身に浴びて、 隠れようすべもあ 眼なざしのあでや の翁。 いみじくも美 御主「ぜす は 女ぢ

えるものは、唯、空をどよもして燃えしきる、万丈の焔 呼ばれた、この国のうら若い女は、まだ暗い夜のあなたに、「は ばかりでござる。いや、誰やらの啜り泣く声も聞えたが、 れて、ことごとく 御声が、星の光も見えぬ遠い空から、伝はつて来るやうで らいそ」の「ぐろおりや」を仰ぎ見て、安らかなほほ笑みを く耳にはいつた。 しながら、伴天連の御経を誦せられる声が、 たるあたりをふるはせて、「ろおれんぞ」の上に高く手をかざ 「いるまん」の「しめおん」でござらうか。やがてその寂寞れは傘張の娘でござらうか。或は又自ら兄とも思うた、あの れは傘張の娘でござらうか。或は又自ら兄とも思うた、 人衆は、風に吹かれる穂麦のやうに、 つたと申す。されば「さんた・るちや」の前に居並 まことにその刹那の尊い恐しさは、あたかも「でうす」の 「ろおれ して御経の声がやんだ時、「ろおれんぞ」と んぞ」のまはりに。跪いた。その中で聞 誰からともなく頭を垂 おごそかに悲し んだ奉教 の響 あ そ

唇に止めたまま、静に息が絶えたのでござる。……

んぞ」の一生を知るものではござるまいか。 さうず。されば「ろおれんぞ」が最期を知るものは、「ろおれ時での海にも譬へようず煩悩心の空に一波をあげて、「未出ぬいだ。なれどそれが、何事でござらうぞ。なべて人の世のんだ。なれとれが、何事でござらうぞ。なべて人の世のんぞ」の一生は、この外に何一つ、知られなんだげに聞き

しものの如し。 特進の事蹟をも採録し、以て福音伝道の一助たらしめんとせの使徒聖人が言行を録すると共に、併せて本邦西教徒が勇猛の使徒聖人が言行を録すると共に、併せて本邦西教徒が勇猛されど内容は必しも、西欧の所謂「黄金伝説」ならず。彼土っだ・おうれあ」と云ふ。蓋し、LEGENDA AUREA の意なり。

上巻八章、下巻十章を数ふ。その他各巻の巻首に著者不明の月中旬鏤刻也」の句あるを除いては、全く上巻と異同なし。す。年代の左右には喇叭を吹ける天使の画像あり。技巧、頗、本千五百九十六年、慶長二年三月上旬鏤刻也」の二行を縦書は、羅甸字にて書名を横書し、その下に漢字にて「御出世以甚しく鮮明を欠き、活字なりや否やを明にせず。上巻の扉に体裁は上下二巻、美濃紙摺草体交り平仮名文にして、印刷

る西人の手になりしやを疑はしむ。て、間々欧文を直訳せる如き語法を交へ、一見その伴天連た序文及羅甸字を加へたる目次あり。序文は文章雅馴ならずし

全くこれを決定するを得ず。無をすら明にせざるを以て、事実の正確なる年代に至つては、の大火なるものは、「長崎港草」以下諸書に徴するも、その有教寺院に起りし、事実の忠実なる記録ならんか。但、記事中あ」下巻第二章に依るものにして、恐らくは当時長崎の一西ム上採録したる「奉教人の死」は、該「れげんだ・おうれ

せらるる事なからんか、予の幸甚とする所なりと云爾。てしたり。もし原文の平易雅馴なる筆致にして、甚しく毀損予は「奉教人の死」に於て、発表の必要上、多少の文飾を敢

(大正七年八月)